

福祉専門職養成における災害教育プログラムの開発のための基盤研究 —石巻・女川スタディプログラムの試行を通して—

A Study for Development of the Disaster Learning Program in the Social Work Training

富井 友子
Tomoko TOMII

和文要旨

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、甚大な被害をもたらし、その後も、地震や豪雨等の自然災害による被害が、日本各地で続いている。被災者の福祉ニーズは、災害発生時から変化を続け、それに伴いソーシャルワークの支援内容も移り変わる。福祉・介護分野では災害時の対応について、実践レベルにおいてもまだ発展途中にあり、専門職養成においても教育プログラムは未確立の状態にある。そこで本研究では、福祉専門職として災害と向き合うことを学ぶ専門職プログラムの開発を目的とし、その基盤となる体験的な短期プログラムを試行した。参加した学生の記録から、プログラムの効果や課題を検討した結果、震災の概況や被害状況については、対象者理解につながる体験を得ており、被災地訪問経験のない学生にとって、有効なプログラムであった。しかし、福祉専門職による実践活動を学ぶには、専門職視点への転換を図るプログラムや教員による介入が必要であり、次年度以降の課題となった。プログラムの日数や訪問先との日程調整といった制約の中で、経験と省察を体系的に積み上げるプログラムを実施するには限界があるが、複数のプログラムによって、災害発生後のフェイズと専門職を定め、専門職視点で災害ソーシャルワークを学ぶプログラムの開発が求められることがわかった。

1. 本研究の目的と背景

東日本大震災（以下震災）から5年が経過した今もなお、甚大な被害によって生活再建に目途が立っていないなかったり、避難生活を強いられている被災した人々は17万人に上る（2016年3月10日現在）。被災した人々の福祉ニーズは、災害発生時からのフェイズ¹⁾によって変化し、それに伴い、福祉専門職が担う生活支援の内容やソーシャルワーク（以下SW）の支援内容も変化する。また支援期間も長期に

及ぶ場合もある。

医学や看護分野では「救急・災害医療」や「災害看護学」といった分野が確立しており、専門職養成にあたっては独立した科目が設定されているが、福祉・介護分野では災害時SW等は未発達な分野である。本学にも社会福祉士および介護福祉士養成課程が設置されているが、現在も両資格をはじめ福祉専門職養成にあたり、災害に関する独立した指定科目の設定はない。さらに、生活支援やSWは、各地域の生活者の状況を把握している必要があり、被災地外からの専門職ボランティアの立場として関わる場合と、自身も被災しながら当該地域を熟知している専門職として関わる場合では、その役割および行動は全く異なる。しかし、こうした内容を学ぶプログラムの実施や研究はほとんどなされていない。

そこで、本研究では、被災地支援ボランティアを通じた教育的なプログラムにとどまらず、当該地域の専門職として災害と向き合うことを学ぶ専門職プログラムの開発を目的とし、その基盤となる体験的な短期プログラムを実施する。本研究では、そのうち同地域で試行したプログラム（以下石巻・女川スタディプログラム）の2回分について、内容や学生の記録を比較することによって、プログラムの効果や課題を明らかにしていきたい。

2. 研究方法と倫理的配慮

本研究では、人間福祉演習を履修している学生のうち、参加可能な学生計10名（2015年度4名、2016年度6名）を対象とし、石巻・女川スタディプログラムに参加してもらい、事前アンケートおよび日々の振り返り記録の記入をしてもらった。各年とも参加時は3年生であった。

事前アンケートでは、①東日本大震災の被災地訪問経験、②スタディプログラム参加動機、③石巻市・女川町（もしくは東日本大震災の被災地）に対するイメージ、④本プログラムに期待する内容、について②～④は自由記述にて尋ねた。

日々の振り返り記録は、スタディプログラム実施中に、各日の終わりに振り返りの時間を設定し、記入時間も設けた。記録用紙は、氏名欄と罫線が印刷されたB5用紙である。記録には、その日に印象に残ったことについて自由に記述するように伝えた。

倫理的配慮として、調査対象者には、オリエンテーション時に、本研究調査の趣旨を説明し、提出物が人間福祉演習の成績には一切関連しないことを説明した上で、調査協力の同意を書面で得た。また、アンケートや記録の分析の際は、データ入力時点で、個人が特定できないようにコード化した後に分析を行った。また、本稿の記載にあたっては、個人が特定されるような名称についてはコード化している。なお、本研究は、十文字学園女子大学・同短期大学部研究倫理委員会の承認を得ている。

3. 実施したプログラムの概要

1) プログラムの実施時期

2015年度のスタディプログラムは、2015年7月30日～8月1日（2泊3日）に実施した。その前後、

¹⁾ 川上（2013a）は、災害ソーシャルワークの5段階として、①災害前段階、②救出・避難段階、③避難所生活段階、④仮設住宅生活段階、⑤復興住宅生活・自宅再建段階を挙げている。

7月24日にオリエンテーションおよび事前アンケートを実施し、10月8日に事後学習を行った。

2016年度のスタディプログラムは、2016年7月31日～8月2日（2泊3日）に実施した。その前後、7月20日にオリエンテーションおよび事前アンケートを実施し、7月27日に事前学習発表を行った。また事後学習は、10月6日に実施する予定である²⁾。各年度のスケジュールは表1と表2の通りである。

〔表1〕2015年度実施のスタディプログラムのスケジュール

7月24日（金）		
オリエンテーション、事前学習、事前アンケート実施		
7月30日（木）		
7:00	集合・移動	往路移動
14:30	視察	石巻市内視察（日和山公園、南浜町、門脇町 等）、語り部の方と一緒に回る
19:00 頃	ミーティング*	介護事業所訪問、振り返り、記録
7月31日（金）		
10:00		介護事業所訪問
11:00	視察	女川町内視察（復興まちづくり情報交流館・語り部講和、女川駅、旧・町立病院）
16:00	お手伝い	石巻川開き祭り灯篋流しのお手伝い
21:00	ミーティング*	振り返り、記録
8月1日（土）		
10:30	視察	石巻市復興まちづくり情報交流館・つなぐ館・石巻ニューゼ訪問
13:00	移動	復路移動、記録
10月8日（木）		
事後学習		

〔表2〕2016年度実施のスタディプログラムのスケジュール

7月20日（水）		
オリエンテーション、事前アンケート実施		
7月27日（水）		
事前学習の発表		
7月31日（日）		
13:00	集合・移動	往路移動
18:30	見学	石巻川開き祭り灯篋流し
21:00	ミーティング*	振り返り
21:30～22:30	ヒアリング*	石巻市社協地域福祉コーディネーターヒアリング*、記録
8月1日（月）		
10:00～11:30		制度外福祉仮設住宅あがらいん見学
15:00	視察	女川町内視察（女川まちなか交流館・語り部講和、女川駅、旧・町立病院）
21:00	ミーティング*	振り返り、記録
8月2日（火）		
10:30	視察	石巻市内視察（日和山公園、南浜町、門脇町 等）、語り部の方と一緒に回る
15:00	移動	復路移動、記録
10月6日（木）		
事後学習		

2) プログラム参加者の基本属性

事前アンケート結果をみると、本スタディプログラムに参加した学生10名全員、東日本大震災の被災地訪問経験はなく、2011年3月11日以前にも行ったことがなかった。2015年度参加者は、全員が震災当時高校1年生、2016年度参加者は、全員が震災当時中学校3年生であった。

スタディプログラムに参加した動機では、2015年度の参加者は、①被災地の状況を、マスコミを通して知ることしかなかったため実際に行き自分の目で見たいという動機と、②震災当時ボランティアに行きたかったが高校生だったため行くことができず、機会があれば行きたいと考えていたためという動機が主なものであった。2016年度の参加者は、2015年度の参加者の動機①と同様のことが挙がっていた

²⁾ 2016年度の後学習は、本稿の提出後での実施となるため、事後学習の比較は、今回の研究の対象外とした。

ほか、②報道も少なくなり、被災地が現在どのような状況であるのかを知りたい、③ゼミに所属したことと被災地について興味を持ったためとの記述もあり、動機の幅は広がっているようであった。

石巻市・女川町（もしくは東日本大震災の被災地）に対するイメージについては、2015年度の参加者は、大きな被害を受けた地域であることや、「仮設住宅が多く存在しているイメージのままでとまってしまう」、「再建が難しいイメージ」、「復興のため、地域一丸となって生活されている」との記述がみられた。2016年度の参加者も、大きな被害を受けた地域であることが主に挙げられており、その他に「今では更地になり復興に向けて動き始めているが様々な問題が出てきているイメージ」、「復興に向けて少しずつ動いている。まだ復興が行き届いていない」との記述や「漁港が盛んなイメージ。様々な特産物があり、人々が優しく、明るい場所」との記述も見られた。

本プログラムに期待する内容については、2015年度の参加者は、被災地に暮らす方の話を聞いて、震災当時の様子や復興の現状を知りたいという内容が主なものであり、その他に「地域による震災との関わり、専門職との連携はどのようなのかあるか聞いてみる」、「復興に向け取り組まれている政策を知りたい」との記述があった。2016年度の参加者は全員が無記入であった。

3) 事前学習とプログラムの主な内容

2015年度と2016年度に実施したプログラムには、共通して実施した内容と、どちらか一方に組み込まれた内容がある。共通する内容は、a. 語り部同行の石巻市内（門脇町・日和山公園周辺）の視察、b. 石巻川開き祭り灯籠流しの見学、c. 語り部講和の聴講と女川町内の視察、であり、2015年度のみ実施した内容は、d. 介護事業所訪問（灯籠流しボランティア打ち合わせのため）、e. 石巻市復興まちづくり情報交流館・石巻NEWSée（以下石巻ニューゼ）訪問、2016年度のみ実施した内容は、f. 石巻市社会福祉協議会地域福祉コーディネーターからのヒアリング、g. 制度外福祉仮設住宅あがらいん見学である。2015年度は、実施初回のため、前述の震災の状況や被害状況を理解するための体験的なプログラムに留まっていたが、2016年度は、福祉専門職として災害と向き合うことを学ぶ専門職プログラムに近づけるために、福祉専門職による実践活動を学ぶ内容として、前述のf～gの内容を新たに設定した。

そのため、事前学習も2015年度と2016年度では、異なった方法で行った。2015年度は、初めて被災地を訪問する学生に対し、先入観を持たずに、地域の状況やその場の雰囲気を感じてほしいと考え、事前学習は、教員から情報を提供し、震災の概況や被害状況を短時間で学ぶものであった。一方、2016年度は、福祉専門職による実践活動を学ぶ内容をプログラムの中に組み込んだ分、震災の状況や被害状況を理解するための内容を減らしているため、事前学習にて、震災の状況や被害状況、訪問先について事前に一定程度理解することを目的に行った。教員からの情報提供の他、参加者6名に対し、7つのテーマ（石巻市の震災被害について、仮設住宅について、制度外福祉仮設住宅あがらいんについて、石巻市の復興まちづくりについて、石巻川開きまつり・日和山公園について、石巻市の名産品について、女川町の震災被害について）を振り分け、各自1,200～2,400字程度でまとめ発表してもらった。

4. 記録内容

1) 語り部同行の石巻市内の視察

語り部同行の石巻市内（門脇町・日和山公園周辺）の視察は、2015年度、2016年度ともに同じ語り部

ボランティア A 氏に依頼し、ほぼ同様のルートで実施した。2015年度は初日、2016年度は3日目に実施している。

石巻市内にある A 氏の自宅は、津波被害によって自宅が2階の上部まで浸水した。夫婦で修繕を行い、震災半年後からは自宅の一部をボランティアの宿泊先として開放している。そこで、震災当初の様子や自身の身に起こったこと、現在の状況についてお話頂き、日和山公園や門脇町周辺では、歩きながら当時の状況や石巻市の歴史についてお話頂いた。門脇町や南浜町は、石巻市内でも非常に甚大な津波被害を受けた場所のひとつである。この地区には、震災前は約1,800世帯、約4,300名が暮らしていたが、死者や行方不明者も多数出ている。一部は公園や防波堤となるため、住民は移住せざるを得ない。現在は、ほとんどが更地になっており、復興公営住宅の建設も続いている。学生の記録は表3の通りである。各年の参加者とも、被害状況の大きさに衝撃を受けたり、被害に遭われた方に心を寄せたり、震災のことを風化させてはいけないと感じたといった記述がみられた。

【表3】学生の記録（語り部同行の石巻市内の視察）

順不同に掲載

	2015 年度	2016 年度
1	<p>今日はじめて自分の目で被災地を見て4年もたっているのにまだ建物の土台しかなかったり、建物には津波のあとが残っていたり震災のときのつめあとがあちこちに残っていたことが衝撃的だった。また、津波を経験し、高台から自分の家が津波に流れているところを目の当たりにした方のことを考えると胸が痛く、膝の力が抜ける思いだった。その思いをしてもなお、石巻に住み続けたいと思う方がたくさんいるからこそ復興へとつながるのだと思うとともに、石巻は本当にいい町だったことがうかがえた。</p> <p>復興をするにしても、津波で家を流されてしまった人、怖い思いをした人の気持ちを忘れてはいけないとおもったとともに、復興というのは震災の前と同じに戻るわけではないということを実際に訪れて学ぶことができた。</p>	<p>日和山公園で語り部の方に石巻の現状や被災した時のことを聞かせていただき、小学校が震災により統合し4年間でバスで通うことになったり、避難所だったグラウンドまで津波が押し寄せ避難した車で火事が起こったことが塩害により何千年もの歴史ある木が腐ってしまい切ることになったことや幼稚園バスが地震が起きて親の元にかえすことだけを考え津波のことを考えずに津波により園児が亡くなったことや震災後小学校のグラウンドの火事跡を見て精神的に不安になった方がいてネットで聞いたことや、震災の跡を市や学者が残した方がいいと思っているが住民は見るのにしのびなく残してほしいという問題が起きていることや余震が起きた時も車で逃げようとして渋滞が起きて教訓が生かされていないと感じたことや余震が起きた時も車で逃げようとして渋滞が起きて教訓が生かされていないと感じたことや食べ物や飲み物、トイレやお風呂もなく血尿になったことや、死体がたくさん転がっていて川から裸のおしりが浮いていくのを流れていくのを見ていて感覚が麻痺したことや、死体を置く場所がなくクレーンで穴を掘り死体をうめて後から掘り起こしてDNA鑑定をしていき地獄のようだったという話を聞かせて頂いたり、自己再建して横や畳や壁などを直されたことや家庭菜園でかぼちゃやぶどうやトマトを自力で生活を立て直して食べていくためにやられていることを聞かせていただき、震災の恐ろしさや震災後の辛さや悲しみや被害が5年たった今でも残っていると感じました。特に死体をクレーンで穴をほりうめて後でDNA鑑定をしていき地獄のようだったという言葉がとても印象に残り、津波や震災の恐ろしさを改めて強く感じました。</p>
2	<p>映像を通してみた被災地から4年経って、復興したように感じていた。しかし、災害前の石巻を知ると、被害の大きさを実感した。ガレキは減っていたものの、住宅などの数の減り方は想像以上であった。浜の方は、復興したというよりも綺麗に片付けたという印象だった。緑は増えていたが、住宅の数が圧倒的に減っていて、被害の大きさを物語っているように感じた。実際の現場に足を運んでみると被害を実感出来たと思っていたが、あまりにも風景が遠くて実際に起きた出来事であると感じにくかった。今回の災害を「忘れたくないし、忘れてほしくない」とおっしゃっていたが、その通りだなと感じた。今となつては、テレビで報道することもほとんどなく、都心では災害のことを4年前の大震災といったような認識であると思う。しかし、「過去の出来事」としてはいけないと今回足を運んでみて、改めて感じた。石巻の方は、震災のことをとても多く語って下さっていて、多くの人に知ってほしい・忘れてほしくないという思いが共通してあるのだらうと感じた。</p>	<p>日和山公園・門脇小学校周辺について、震災前の様子は写真でしか見たことないですが、震災のあった門脇小学校周辺はさらの地ようになっていました。あのさらは元々あのような状態だったのかと思うような光景でしたが、住宅が密集していたと知り驚きました。門脇小学校では車などから発火して火事になったり津波がおそってきたりしました。安全であるはずの避難所（学校）が被害にあっていくことは誰も想定しないことです。また幼稚園や学校で地震の後は津波が来るから高台へという教育や考えが徹底されていないということを知りました。</p> <p>A さんのお宅へおじゃまして津波の後を見学しました。今でも跡が残っていて、2階に到達していました。天井に残っていた亀裂を見て、津波のすさまじさを感じました。</p> <p>震災後におきた地震で避難指示がでたときに、当時と同じように交通渋滞が起きて教訓がいかになかったと聞き、震災のことは風化させてはいけないと改めて感じました。</p>

3	<p>今回、初めて石巻に着いて、はじめは町並みの様子や雰囲気を見てみて、駅前あたりは特にがれき等もなく、復興の兆しが見えてきたのかなと自分で感じていた。お昼のビザ屋では自身のお店でもある食材の不足、支援物資が届かない、近所の人たちとのやりとり、場所によって様子や配食の状況などが全く違っていたと話を聞き、震災直後の数日～数ヶ月間の話をきくことができた。</p> <p>次にAさんのお宅に移動したが、Aさん宅にも震災による爪痕が残っていて、衝撃であったが、その後に移動した周りの風景を見て、言葉が失った。復興は震災4年経った今でもなおらず、震災前の様子の写真を見て分かったように、建物はほとんどなく、更地に近い様子であった。特に沿岸部辺りでの小学校では、火事による焼跡が生々しく残っていたり、被災者の心理状況のことを考えてネットが張られていたりなど、また地面を掘り起こしている近くでは暑さもあり、異臭がまだ残っていたことが自分の中では大きかった。Aさんは、私達に一つ一つ丁寧に場所の話をしてくれて、震災の様子とあわせて知ることができた。TV番組や自前に見た写真からは分かることが出来なかった思いがあり、自分が思っている以上に震災を実際に経験した方々の気持ちがあるのではないかと考えられた。</p> <p>今回、私が一番強く印象に残っていたのは、被災者の前向きな姿勢と支援者の不足についてである。Aさんと〇〇さん（介護事業所職員）、お昼やおやつのお店の方々などの話は今後の世代へ話を繋げていきたいという思いと、震災はまだ完全には終わっていないという事、自分達にまず何ができるかという、このままではなく、一刻も早い復興を望まれているという事であった。そのために近所の人や行政との連携も地域では求められていると学んだ。</p>	<p>語り部ガイドの方のもと、石巻市内にある日和山公園から被害を受けた街等を中心に暑さの中間行した。当時の震災の状況では、市内にあった幼稚園のスクールバスが避難にあい、運転手以外が亡くなってしまったことや旧門脇小学校には被害に巻き込まれ、跡が残っていた。初めて被害にあった市内の状況を見て、言葉が見つからず、当時最悪な状況で人々に悲しみが止まらなかったのではないかと感じた。まだ語り部ガイドの方の自宅を訪問し、そこは当時津波によりがれきによって家の1階部分が巻き込まれ、床・壁が抜けて穴だらけになってしまい、手作りで板を貼っていた。2階の床下も津波の跡が残っていたので、当時は家の状況がライフラインなどにより大変で、余震が続いていた中で不安な日々だったのではないかと思います。</p> <p>今回、初めて石巻市内の震災の状況を見て、今でも工事による改修やボランティアなどの派遣の支援に時間がかかっていたり、復興に向けての町づくりに今後課題としてなっていくのではないかと思います、学んだ1日だった。</p>
4	<p>今回初めて被災されたあとを見てA氏の自宅の津波がここまで来たという「線」を実際に見て、2階の自分の跡あたりまで来ていたことにとても驚いた。家の中はきれいに直した所とわざと残されている場所と分かれていて、〇〇さん（語り部ボランティア）が奥さん2人で一緒にご自分の力だけで家の修復されていて、〇〇さんに「落ち込んでばかりいれない」「自分の力でやってやろう」というような気持ちがみられた。</p> <p>また一番印象に残ったことは、グラウンドを使用する中学生のために校舎をネットで覆っていて、それが、精神的な不安を与えないようにされていたことだ。私はつらい記憶を思い出して不安や恐怖を引き出されたことはあまりない。地震や津波は私が想像できない程の恐怖を与えたのだと感ずることができた。お話を聞いていた中でも、浜の方に行くとなると具合が悪くなるとあって、4年たったいまでも恐怖は消えることはないのかと思った。</p>	<p>日和山公園では海がきれいに見えて4月には桜が見頃とお聞きした。景色が絶景であるため多くの人が桜を觀賞されるのかと思いきや震災の影響から人はあまり集まらないという。東京では桜が見頃になると人がたくさん集まり、にぎわっている。そこから震災の爪跡の大きさを感じた。語り部の方の自宅を訪問させて頂くと、津波による被害がまだ残っており、いかに被害があったのかを感じた。津波は少しタイミングが遅いと命を落としてしまう。甘い考えで「大丈夫だろう」と考えていると、津波にのみこまれてしまうのだと思った。語り部の方はお元気で被災されているようには見えなかったが、家から立ち退かなくてはならないと語られていたときには、すごく悲しい表情をされていた。生まれて初めて農作物を育て立派に育ってうれしいとおっしゃっていたのに、立ち退くという現状を受け止めざるをえないことに、切ない気持ちになった。</p>
5		<p>日和山公園、門脇町の話をくださったAさんのお話を伺うと、震災時いかに大変であったのか、分かりました。Aさんの家にも津波のつめ跡があり、おそろしいものだ改めて分かりました。津波によって亡くなられた人は多く、私よりも若い年齢の子どもが亡くなったと思うと悲しい気持ちになりました。</p>
6		<p>震災当時は、めずらしく雪が降っており、地震の影響で電気、水道が止まった状態だった。その為、トイレも使えず、外で用を足していたので、衛生的に悪く、住民達も精神的に追い詰められていたということが話を聞いて伝わってきた。当時、門脇小学校にいた先生・生徒達は襲ってくる津波に恐怖を感じながらも、助かる豊富尾を考え、机を使って逃げ道を作ったおかげで、死者が一人も出なかった。外階段もなく、さらに火災が発生し、誰もが死を覚悟をするはずなのに、最後まで生き残ることをあきらめず、生徒達を守った先生方の強い勇気はすばらしいと感動した。震災から5年経った今でも、まだ津波の爪痕は、残っていて、完全に復興したわけではないということを知った。それでも、現地の人々はお互いに協力をして、自分たちの故郷を取り戻そうとする姿勢に感動した。もし、自分の生まれ育った町が悲惨な状況になり、友人や家族を失うことになってしまったら、取り乱してしまい、立ち直れないと感じた。実際、被災地に行き、目で見て感じて、二度とこのような悲劇が起こらないよう自然災害対策を考えていく必要があると改めて感じた。</p>

2) 石巻川開き祭り灯籠流し見学

石巻川開き祭りは、川の恵みへの感謝と先祖供養の行事として、毎年8月に行われており、震災以前からも、一年の間で石巻市に最も人が集まる程、大規模な行事である。2011年以降は、東日本大震災供養祭や犠牲者を追悼する灯籠流しが行われている。石巻川開き祭り灯籠流しの見学は、2015年度は2日目に実施し、灯籠流しで使用する灯籠の組み立て等のボランティアも行ったが、2016年度は初日に実施し、灯籠流しの見学のみを行った。学生の記録は表4の通りである。各年とも、厳かな空気を感じているが、灯籠の組み立てから関わった2015年度参加者の感想と2016年度参加者の感想には違いが出ている。2015年度参加者は、石巻市内や女川町内の視察を終えた上で見学しており、また、灯籠の組み立て時に、灯籠に書かれているメッセージを読んだことで、灯籠流しや祭りが石巻市民にとってどのような意味があるのかを考察しようとしているが、2016年参加者は、事前学習にて震災による被害状況や祭りについて知識を得ており、その場の厳かな空気を感じつつも、記録には、主に灯籠の美しさや祭り全体の印象が挙がっていた。

〔表4〕学生の記録（石巻川開き祭り灯籠流し見学）

順不同に掲載

	2015年度	2016年度
1	灯ろう流しでは、多くのボランティアの方が参加されており、地元の役場の方、石巻専修大学の学生さん、長崎からきている高校生のボランティアさんなど様々な地域から参加されているのが印象的だった。みんなで力を合わせて流した灯籠はとてもきれいだった。	今回、東日本大震災供養祭・流燈に参加し、多くの人々にぎわっていた。しかし、流燈では厳かな雰囲気があった。商店街の通りは、活気があり過去に被害があったようには感じられなかった。
2	灯ろう流しでは、地元の方も気軽に話しかけて下さって、皆さんが迎えてくれているような感覚であった。はじめて来た場所だけれど、とても居心地の良い場所で凄く素敵だなと思った。	石巻川開きまつりに行くのは初めてで、多くの屋台があるのにも驚きましたが、子どもから高齢の方と多くの人々に賑わっていたのが印象的でした。燈籠も非常にきれいでした。燈籠をみるのは初めてでしたが、厳かな感じが、流れていく様子をずっとみていられると思いました。私は今年初めてのお祭りだったので、とても楽しかったし、おいしい物たくさん食べることができたので満足しました。
3	灯籠流しでは、地元の方々や行政、学校等のボランティアが団結をして5000個の灯籠作りを行い、その土地の活気が伝わった。灯籠を川の方へ運ぶ中、紙には「もう一度抱っこしたい」「安らかにしてください」「一日もあなたの事を忘れないです」等のメッセージも書かれていて、Bさんも言っていたが、被災している人が10人いれば10人それぞれの経験があるというその言葉が深く残った。家族、友人、恋人などを失ったそれぞれの経験があり、灯籠流しの経験と共に言葉一つ一つがまだ復興は終わらず、残された被災者の思いが見られたのを感じた。話を聞いたり、実際に目で見えたからこそ自分も人に伝えていき、後世に残していかなければと思った。	お祭りの屋台の規模や来客数など、想像以上に多くて驚きました。後からCSCの方にお話を聞いて、この2日間で1年間で一番石巻が盛り上がるとうわりました。 灯ろう流しは人生で初めて見ました。夕方に見るのもきれいでしたが、暗くなるにつれ厳かな雰囲気になりました。 お祭りや花火は今年初だったので、屋台をまわったりみんなと話したりできて楽しかったです。
4	灯ろう流しのお手伝いをさせて頂いたが、組み立ての時に、亡くなった方のための言葉や「新しい家で待ってるね」というような言葉もあり、それがたくさん全部で54個もあって、大変な作業であったが、1つ1つの思いが詰まったものであった。灯ろうを流すときは、皆でバケツリレーを行った。1時間かけて流し、全部が流れたものはとてもきれいだった。 最後に花火を見た。とてもきれいだった。地元の人がみんな集まって見て楽しかった。震災の影響で花火の打ち上げ数が少なくなったと聞いていたが、残った人が笑顔となれる。そして亡くなった方もその笑顔を見て、安心してくれればよいなと思った。	石巻川開き祭り及び東日本大震災供養祭・流燈は石巻市ならではの伝統的なお祭りで、たくさんの方が来ていて、実際に川近くの川沿い(土手)付近にて見学した。たくさんの方々が流れていて、明かりがとてもキラキラと輝いていたので、生で見れて良かったと思う。
5		お祭りと灯籠流しでは、関東で私が行くお祭りに比べて静かなイメージであったのが第一印象である。19:00前に灯籠が流れているのを見たときは空が明るかったのですが、あまり灯籠の良さに気づけなかった。暗くなり、流れてくる灯籠の数が増えてきて、やっと本番がきたかのように、とてもきれいな景色を見ることができた。

3) 語り部講和の聴講と女川町内の視察

女川町観光協会では、視察訪問団体に対して、災害当時や復興の様子について「語り部ガイド」を行っている。女川町は、海拔16mを超えた津波によって壊滅的な被害を受けた。その後、土地のかさ上

げ工事を行っていたが、ここ1～2年でJR女川駅付近は、新たな建物が建てられ、劇的な変化を遂げている。語り部のB氏は、災害当時の様子や女川町の変化、自身の父親やおじが行方不明となったこと、女川中学校卒業生を中心としたいのちの石碑プロジェクトのことなどを写真やVTRを使いながら話して下さった。B氏の好意により2015年度・2016年度ともB氏から話を聞いている。2015年度は、2日目に実施し、話を伺った場所は、復興まちづくり情報交流館であった。プレハブの建物であった復興まちづくり情報交流館は、2015年12月に閉鎖しているが、女川町の歴史や震災後のまちづくりについて、パネルや模型の展示も行っていた。2016年度も、2日目に実施し、JR女川駅近くに新たに建設された女川まちなか交流館にて話を伺った。以前と比べ、展示物が一部少なくなっているものの、復興まちづくり情報交流館にあったパネルや模型が展示されており、それらを見た後に、B氏の話をお伺いした。

その後、高台にある旧女川町立病院（現・女川町地域医療センター）に行き、津波の高さを体感したり、高台から女川湾を見て当時の状況を想像したり、敷地内に建てられているいのちの石碑プロジェクトの石碑を見学した。学生の記録は表5の通りである。各年とも、主に、津波の威力や被害の状況に恐ろしさや犠牲者やその家族への悲しみを感じた記述が書かれている³⁾。

〔表5〕学生の記録（語り部講和の聴講と女川町内の視察）

順不同に掲載

	2015 年度	2016 年度
1	<p>午前中女川の情報交流館でのお話で、人口一万人のうち、827人が亡くなり、そのうち258名がいまだに行方不明となっていること、過去に2回大きい津波も来て、その度に女川の町人が力を合わせ再建してきたことを学んだ。そのことから今回の震災でも、過去の経験から大丈夫だと思ってしまう避難しない方が多くいたため、被害が大きくなってしまったことを学んだ。映像資料をみて津波が押し寄せてくるところは何回もテレビで見たが、実際津波が押し寄せて何もなくなってしまった所を見ると、被害の大きさを実感でき胸が苦しくなった。16mの丘の上に建っている病院の駐車場まで津波がきて駐車場に非難した方がそのまま流されてしまった話もきき、実際に訪れてみると、とてもこの高さまで津波が来るとは思えず驚いた。そこにあった中学生が建てた石碑の文で「逃げない人がいたら無理矢理にでも連れ出して下さい。家に帰ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めて下さい」といった部分がとても印象的で東日本大震災を経験したからこそその痛切な願いで、これからの人に同じ思いをさせたくないという思いが伝わってきて、私も今回の震災で起きたたくさんの人の辛い思いを忘れてはいけないと思った。高台からみた女川は海も山もあり、お昼に食べた海鮮丼はとてもおいしくて、住民の皆様が、女川が大好きな気持ちが伝わってきた。また、生まれ変わった女川を見に来たいと思った。</p>	<p>女川まちなか交流館の方から女川震災被害について聞いて、女川では827名の水魚が死亡又は行方不明で一番被害が高く、山林が多いことから山にぶつかり水位が上がって、海拔16mの病院まで津波が到達し、木造の建物すべてが流され鉄筋コンクリートだけが横倒しになったと聞き津波の威力を感じました。津波は最初6mと伝えられていたのに45分後には20m級の津波がきて誰も予定していなくて、死亡又は行方不明になった方の半分以上が高齢者の方で以前にチリ地震の経験から大きな津波を予測できずに逃げ遅れてしまったということや2階建ての避難所とされていた所も流されてしまったりと聞き予想できない被害が女川を襲ったんだなと思いました。中学生が4年後にこの悲しみを味合わせないように石碑をつくり記憶を残していこうとしていることや土地をかき上げし住宅を山の上に作って、震災の悲しみを二度と将来の世代に味合わせないようにされているんだなと思いました。実際に女川を見て石碑がある場所がこんなにも高い津波がきたんだと知りとても怖くなりました。</p>
2	<p>町づくり交流館でのお話はとても貴重なものだった。東日本大震災以降、東京でも小さな地震など数多くなってきたけれど、回数が増える度に地震に対し慣れを感じていたと思う。でも、女川町の方達も津波はここまでしかこないと思ってしまったことで逃げ切れなかった人も多かったとおっしゃっていたのを聞いて、災害に慣れるというのは、危険なことだなと感じた。災害は常に備えなくてはならないと改めて実感した。津波の映像をみて、現実でこんなことが起きるものなのだと衝撃をうけた。建物が一番上に避難すれば安心だと誰もが思うだろうし、まして、あれほどの大きな津波が警告が出てからすぐ押しよせてくるなんて想像できないと思う。再びいつ津波がくるかわからない状態であるうえに、一度でも東日本大震災を経験した人が町を出ていかずに復興に向けて、がんばろう！という姿はとても強いなと思った。自分の住む町に対する強い想いと町の人同士の絆は被災地ならではの、力強く素敵なものだと感じた。会う人会う人が“ここはいい町だよ”という理由は、言葉にはできないけれど、なんとなく理解できたように思う。</p>	<p>午後は、女川まちなか交流館に行き、震災の話を聞いた。当時、私は自宅にいてリアルタイムでTVで津波の恐ろしさや自然災害は、予想していたものより、遙かに想像を超えるのだと改めて実感した。女川町が最も被害が大きく、1万14人のうち827名が亡くなり、さらに、その827名のうち278名がいまだ見つからない現状だということを知り、改めて震災の被害がいかにひどかったか話を聞いて学ぶことができた。危機的な状況になった時に、どこか非難し、どう行動すればよいかわからず家族と話し合っただけで済む必要があると学んだ。</p>

³⁾ その当日に行った振り返りでは、参加者に対し、その日に感じた恐怖心や悲しみ、心の痛みを一人で抱え込まずに、友人や教員等に話をするように伝えている。

3	<p>女川町では、車で移動したが、入った途端に景色が変わったのが分かった。重機や周りの土地の規模も違っていたため驚いた。Bさんのお話では、今まで何回も（大正やチリ地震による影響など）地震やそれによる津波の被害はあったが、まさかここまでだと思わなかった。人口1万人のうち827人がいまだに行方不明であるという話を聞き、警報による大切さ、逃げなくてはいけないという事を改めて感じた。映像を拝見したが、これが4年前に実際にあったと考えると恐ろしかったし、20m近くにもなる波はまだ想像しづらかった。今回の地震により、居住宅を30mの高さにすることや平成30年を目途に山を崩しながら行っていると感じ、女川町に住んでいた人達の思いにより、再建の予定は早いと思ったが、今の状況や作業場で建て直している方々の増加や材木等の物資などの課題等もまだ多くあるのだと考えられる。</p>	<p>3月11日に発生した地震の影響により、死者・行方不明者をあわせると827名（2013/9/10）と、非常に大きな被害であったことが分かりました。津波により、木造の家は流され、津波の高さも最大14.8m（マンション5階天井位の高さ）ととき、驚きとともに、恐怖心も芽生えました。当時、津波がくるとしても5～6mと思われていたみたいで、高い所へ避難しなくても大丈夫と考えていた人が多かったみたいです。Bさんの話によると、死者・行方不明者827名以上のうち半分が60歳以上であり、約400人の年配の方が津波によって亡くなったと考えると、地震は非常におそろしいと感じました。私はテレビでしか津波の状況をみていなく、写真を見るかぎり、非常に大きな被害があったことが分かります。Bさんは、実際にその場において、その目で津波の状況もみていたため、津波がいかにおそろしいものなのか私たちに伝えてくださいました。</p> <p>2日目は、仮設住宅、震災のおそろしさも多くのことを学ぶことができてよかったです。あらためて地震の被害の大きさが理解できました。</p>
4	<p>今日の午前中は情報交流館に行った。女川の震災・津波の前と震災後の女川の模型や資料の画像と映像を見て、津波の大きさと距離がとても驚いた。映像を見て、津波が迫ってくるものや建物や車が流されていくものは何回も見ても怖いものだし、人々が果敢として状況が分かっていないのだろうと感じた。</p> <p>中学生の女の子たちが書いた絵や言葉は未来の女川の復興を信じているのを感じ、お話の中で「ここに住みたいと思っている」ということを聞いて、津波への怖さはもちろんあるだろうが、女川への愛がとても感じられた。また住居の確保のため山を削って、ここまで、削られるというものとここまで、地上が上げられるというものもあり、4年たってもまだ住むことはできないけど、少しずつの復興が見られた。</p>	<p>女川町について、震災当時、テレビや新聞で様子をただ見ただけでも驚いたが、お話をうかがう中で当時の様子はより衝撃的でした。波が来てひくまでの時間が12.3分という短さでも驚きました。病院の方まで視察に行ってみて、高台にある病院の1階部分にも到達したというのを見て実際の高さに自分だったら何もできないと感じました。</p> <p>今後は、住居と職場のエリアにわたる、土地のかさ上げをするなど、実際に見てみてわかるぐらい動いているのだとわかりました。山の上の方に住むのは大変そうだと感じて、人の命には変えられないと思いました。</p>
5		<p>女川町にて講和・駅の視察を中心に行った。テレビや新聞等で女川町の被災状況を得ていたが、実際に初めて訪れてみると、街の景色や津波等の自然災害の恐ろしさを痛感した。特に津波に関しては、マンション5階位の天井位で約15mほどの高さまで沿岸から街・山沿い付近や人々が巻き込まれてしまうほどの衝撃を自分として改めてどう受け止めれば良いのか戸惑った。</p> <p>また、被災地女川町では、まだまだ建物の再建等復興に時間がかかったり、課題が解決できないことがたくさんあるので、被災状況をもっと向き合いたいと思った。</p>
6		<p>女川では津波による死者、行方不明者が827名いるということで、心が痛んだ。最大津波高は14.8m（マンション5階の天井の高さ）ということで、非常に驚いた。そんな高さを目の前にして亡くなった人の気持ちを考えると、とても苦しい。鉄筋コンクリートさえも横倒しになってしまうという津波の強さに、また恐怖を感じた。数分前まで静かだった海がいきなり激しくなる映像を見て、自然はいつでもどうなるのか分からないのだと思った。自然は豊かであるが、時には非常に怖い顔を見せるものなのを知った。</p>

4）石巻市復興まちづくり情報交流館・石巻ニューゼ訪問

石巻市復興まちづくり情報交流館は、石巻市の歴史、震災の記録、復旧・復興の進捗状況やまちづくりに関する情報について発信し、来訪者との交流の場を創出するために設置された。訪問当日は、館内スタッフが学生に説明をしてくださり、震災当時の様子や復旧・復興の状況について概括的に理解することができたようである。

石巻ニューゼは、石巻日日新聞社100周年を記念して2012年11月に開設された。被災直後の石巻市や東松島市、女川町を写した写真や石巻の歴史パネル、震災直後に発行された日日新聞社の「手書き壁新聞」が展示されている。訪問当日は、石巻ニューゼ館長が、震災当時様子や報道部長として取材の指揮をとる中で、手書き壁新聞を作成されたときの思いを話して下さった。館長に、学生たちが福祉学科に所属していることを伝え、高齢者や障がい者に対する避難誘導の現状について話して下さった。学生の記録から、このことが、学生にとって専門職視点への転換の導入となったことが読み取れる。

これらの訪問は、2015年度の3日目に実施し、2016年度は休館日やスケジュールの都合上、訪問できなかった。

[表6] 学生の記録（石巻市復興まちづくり情報交流館・石巻ニューゼ訪問）

1	<p>石巻復興まちづくり情報館では、石巻について過去の資料から震災のときの資料まで展示されていた。館長さんが外国の方で英語と日本語の2ヶ国語を話せるため外国の方が来ても対応できるとおっしゃっており、とても印象的だった。また、この施設では、展示されていたものの中に、実際にまちなかまでやってきた津波の高さをするしたものがあり、海からはなれているまちなかもこれだけ大きな津波がきたのだと思い、驚いた。その後行ったニューゼでは、震災時の様子を館長さんが詳しく話をして下さった。その中でも特に印象的だったことは高齢者や障がい者を抱えている家族の震災対策であった。今回の震災で、やはり高齢者や障がい者は、津波から逃げるのができず、多くの方が犠牲となったことは以前ニュースでみて知っていたが、実際、家族や地域の人が自分たちの命を守ることに精一杯で、高齢者障がい者を助けることができず、亡くなってしまった話をきき、すぐにでも対策をとって次にくる災害のときは少しでも犠牲者を少なくする必要があると思った。</p> <p>今日、石巻は川開きまつりのメインの日で、まちなかにはたくさんの人であふれていて、たくさん笑顔があった。しかし、ここにいた多くの方がそれぞれ何かしらの形で震災を経験し、家族、友人、大切な人を亡くしたり、本当にこれから自分たちはどうなってしまうのだろうと不安や絶望を覚えたのだと思うと、胸が痛くなった。石巻だけに限らず、みんな辛い思いをし、それを超え、乗り越えようとし、前に進もうという前向きな希望を感じられ「復幸」という文字に現れているように、震災で辛いおもいをした人たちが一日でも早く心の底から幸せを感じる日々を過ごせるよう応援したいと思った。</p>
2	<p>午前中、震災に関する博物館（施設）を訪ねて、はじめに行った場所では、震災の規模の様子、死者、行方不明の数、その際の自衛隊や自治体の取り組み、また、過去の震災から振り返ってどうだったのかを知ることが出来た。印象であったのは建物の中に柱があったことで、その柱は津波 2.1m がこきまでだという線があったことで、自分の身長よりも、遥かに大きな波が来たという事が改めて感じられた。また学んだことは、門脇小学校付近では、1600 世帯の住宅があり、全て津波で倒壊してしまったことであり、いつ起こるか分からない。昨日まで帰っていた家が突然無くなる恐ろしさを感じた。石巻市内だけで復興するのは 100 年とされていたが、他の県の協力により去年完成したのは、日本の良さと改めて気づかされた。</p> <p>2 つ目の場所（ニューゼ）では、震災の高齢、障がい問題についても触れていたのが関心がより持てた。石巻でも高齢化率は 26% と高く、震災時の介護ボランティアの不足が新聞を見ただけでも 13 ヶ所あったため、高齢者の震災時の様子についてより深く追求してみたいと感じた。被災者自身も自分が優先か、高齢者やハンディを抱えた障がい者が優先なのかジレンマを感じると聞き、震災体験者は自分で自分の身を守るいわゆる「自助」の考えが大切だといえるが、目に見えない復興、PTSD 等の影響も今後在宅の高齢者や障がい者が多くなっていく中、増加していくのではないかと考えた。自分自身も、家族等の中で一度話し合ってみなければと思った。</p> <p>この 3 日間の中で、多くの人と出会い、貴重な話を聞くことも出来た。全て前向きに復興について考えており、地域のあたたかみも知ることが出来た。初めて自分の目で見て感じたことを決して忘れてはいけないのだと思い、また、ニュース等では知れなかった事も知らなかった人に伝えてく事が大事だとする。</p>
3	<p>はじめに行った情報交流館では模型を使つての説明をして下さり、震源地と被災地の距離感が良く分かった。多くの写真を見た中で、津波が迫ってきているものが、とても印象に残った。写真が撮られた場所もすぐに飲み込まれたということがとても怖く感じた。人々が立ちつくす写真やがれきの中で暗い顔をしている写真、給水所にたくさんの人が押し寄せている写真、たくさんの被災時の写真があり、4 年の前の私の記憶にはないもの、ことが多く存在したのだと感じた。</p> <p>2 つ目に行った所では、被災時に発行された 6 日間の手書きの新聞が展示されていた。3 月 11 日から発行され最初の 2 日間は「壊滅」という言葉が多く出て、悲惨な現状を情報としていたけど、それでは気持ちが落ち込んでしまうと 3 日目からは「ボランティアが派遣されていること、物資援助が届いている」等、光が見えてくるような情報の発信に切り換えたとお話されていて、読んでいる方にとっては、1 枚の手書きの新聞が生きて希望となっていたのではないかと感じた。</p> <p>また、実際に取材された中で、お隣の家の寝たきりのおばあちゃんとお線さんと亡くしてしまったお話を聞いて、手を引っぱってもお線さんだけは連れていけば良かったとお話があり、命の選択はないけれども生きられる可能性のあったとして後悔されているのが、胸が痛んだ。</p>

5) 石巻市社会福祉協議会地域福祉コーディネーターからのヒアリング

石巻市社会福祉協議会では、被災者の生活再建や地域づくりを支援するため、市内10地区に分けて各地区に地域福祉コーディネーターを設置している。現任の地域福祉コーディネーターC氏から、石巻市の最近の状況、地域福祉コーディネーターの業務内容、勤務する中で見えてきた課題についてお話を聞いた。このヒアリングは、2015年度には実施しておらず、2016年度は1日目に実施した。学生の記録は表7の通りである。1日目の内容は、このヒアリング以外に、石巻川開き祭り灯籠流しの見学のみだったため、今後は、地域の方の生活状況に対する認識を深めた上で実施した方がより効果的ではないかと考える。

〔表7〕学生の記録（石巻市社会福祉協議会地域福祉コーディネーターからのヒアリング）

1	石巻市社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカーさんのお話を聞いて、一見駅周辺では震災があったようには見えな いけれど震災の爪痕が大きく残っている所があり、普通のアパートに見えるけれど復興住宅が街中にたくさんあると知りました。 人によって復興住宅に住んでいたり、引っ越ししたり、行き先が決まっていなかったり、自立再建をしている人と様々にいて、それ ぞれの色々な人の状況の話を聞いてそれぞれの人に合わせた支援かサポートが必要と分かりました。復興住宅では大きな所では集 会場で外部のボランティアがきたり、イベントが行われていることが分かりました。しかし復興住宅では自己再建が難しい高齢者 が多く交流がなかなか難しいことやなり手がいないことが問題としてあり、復興住宅に入る前に住民同士の交流会などが行われな いまま入居がはじまり、近所にどんな人が住んでいるのか分からない近所の人との交流やつながりが難しくなっていると知りまし た。住民同士が地域で支え合って仲良くできるような仕組みをつくっていくためには色々な地域に詳しい人の話を聞いて歴史を知 り、地域のひとと一緒に考えて、地域が支え合える仕組みを一緒につくっていき、地域の方がつながりたい思いがある時等は間に入 りてうまくつなげていける仕組みを考えていくことが大切と分かりました。
2	地域福祉コーディネーターのCさんのお話を聞いた。地域福祉を推進しており、楽しく地域住民で支え合いながら暮らしていく には、どうしたら良いか一緒に考えていくことを基本としている。石巻では、町中に復興住宅があり、皆が仮設住宅に住んでいる わけではなく、落ち着いて復興住宅に住んでいる人ややっと復興住宅に住めるなど状況は様々であることが分かった。一人一人の 状況が違うので、それぞれどのような支援を求めているのか、個々にあった援助を考え、サポートしていくことが大切だというこ とを学んだ。
3	石巻市の現状や仕事の内容をうかがいました。住民によって状況がちがうため、それぞれに合わせた支援が特に大切だと思いま した。これししようというように命令をするのではなく“一緒に”考えていくという姿勢や考えをもって行っていることがわかり ました。高齢化の問題も深刻だとわかりました。 住民主体の大切さと難しさがよくわかりました。住民どうしでお互いに支え合えるために“元”民生委員や自治会長の方にお話し をうかがうなどの工夫もされているのだとわかりました。
4	現在の石巻市では、被害を受けた地域はがれき撤去をし、跡地として残っていたり、街中には多くの復興住宅等復興に力を入れ ているのではないかと思った。しかし、現状では人々がだんだんと日常生活を取り戻していると思われるが、中には5年前の記憶 が残って不安だという人もいるため、地域をよりよくするため、住民同士と社会福祉協議会等が連携して考えながら取り組むこと はとても大切なことだと改めて感じた。また、駅や商店街等石巻市は過疎化が進んでいるが、伝統のある地域を守っていくために も、計画を立てることが難しく、新たな課題点であるのではないかと思った。
5	地域福祉コーディネーターの方のお話では、復興住宅に住んでいるのは高齢者が多いと聞いた。なぜなら高齢者は再建が難しい からだという。若い人は再建可能なため、自立生活を送れるが高齢者にはそれができない。また高齢者であることで、他者と積極 的に交流をはかりたがらないため、支援が難しいのだと思う。地域福祉コーディネーターはできることを一緒に行っていくことが 仕事である。一緒にやるのが大切なため、地域福祉コーディネーターが一人よがりな支援をしても状況は改善しない。その方に 合ったペースで無理がないように進めることが大切であると感ずることができた。担当エリアは小学校区というようにせまい範囲 を対象としていることから、その方を知り、個別支援もしやすいのではないかと考える。
6	夜は、社協に勤めているCさんからお話をさせて頂きました。Cさんは、地域福祉コーディネーターとして、住民がお互いに支え 合うのを支援・地域で支え合って仲良くするにはどうすればいいか考える等、色々話をしてくださりました。地域福祉コーディ ネーターについては、授業で少し触れていたこともあり、Cさんのお話は非常に興味深かったです。

6) 制度外福祉仮設住宅あがらいん見学

制度外福祉仮設住宅は、宮城県内にあるNPO法人が運営しており、援護や支援が必要ではあるが、既存の制度では対象とならない被災者に対し、自立支援を目的に住居と生活支援を行っている。震災当初は、震災によって表面化・増加したアルコール依存症の人やDV被害者に対する支援を行っており、現在は、生活困窮者支援を中心に支援を行っている。このヒアリングも、2015年度には実施しておらず、2016年度は2日目に実施した。学生の記録は表8の通りである。制度外福祉仮設住宅あがらいんについては、事前学習を行ったが、生活状況について初めて詳しく知ることもあり、支援の流れをより明確に捉えた上で、見学を行った方がより効果的であったのではないかと考える。

〔表 8〕学生の記録（制度外福祉仮設住宅あがらいん見学）

1	制度外福祉仮設住宅あがらいんを見学して地域の方々が孤立しないように集いの場をつくったり、住み慣れた地域で暮らし続けられるような支援が大切だと分かりました。あがらいんは一時的な場所、生活課題を解決してその人が望む所へつなぐことを大切にされているんだなと思いました。
2	高齢者・障害者・DV 被害者など様々な状況にある人々が震災前から受け入れていることが分かった。震災当初は、震災がきっかけで失うものが多く、酒に走りアルコール依存症になる方や仮設住宅だと物音が聞こえるためプライバシーがなく、ストレスが原因で、DV が起こってしまっていた。現在では、生活困窮者が多い為、住民達が孤立しないよう支えていく支援が必要だと学んだ。
3	事前学習であがらいんについて調べていましたが、実際に行ってみたら違った印象を受けました。施設の中はとてもきれいで落ち着いていて、バリアフリーになっていました。ただ利用長期化が想定外だったため、建物に限界がきている部分があるとわかりました。入居者が高齢者だけではないため、それぞれに合った支援をするのは大変そうだなと思いました。
4	制度外仮設住宅あがらいんにて、講義と見学を中心に学んだ。あがらいんでは主に生活困窮者や家庭内での暴力・DV を受けている人等といった人達が問題を抱えていながら、仮設住宅内で孤立化しないようにサポートするのが目的であることを理解した。最終的に住民同士が住み慣れた地域をよりよい社会にするために、特養やユニットケア等の介護援助だけでなく、キッチンカーでの配食や子育てサロン等を提供している。また、相談・助言も行うことができるので、生活課題は半年以上かかってしまうのは仕方ないが支援を継続することが大切ではないかと思った。
5	仮設住宅の第一印象は「きれい」であった。私の想像の仮設住宅はもう少し汚いイメージがあったので、予想外だった。また月ごとに様々なイベントが行われおり、施設と似ている部分も多いと感じる。食を通じて人々の交流をはかり、そこからその方の隠されたニーズを発見していくという方法も効率が良いと思った。食から入ると入りやすいとお聞きしたが、納得できるような気がした。また、他の仮設住宅では、フローリングを使用している。だがあがらいんでは寒々しいという理由からじゅうたんを使用している。少しの配慮があるだけで印象はかなり変わらなと思った。
6	開成にある制度外福祉仮設住宅あがらいんに見学させていただきました。仮設住宅を訪れるのは初めてだったので、中ほどの様なのか、非常に気になりました。仮設住宅は、私が思っていた以上にきれいでした。あがらいんでは地域食堂があり、そこで出すのはトンカツ等の揚げ物が多かったです。なぜ揚げ物が多いかというと、高齢の方は、揚げ物をつくると火事のおそれがあるため、食べる機会が減ったとおっしゃっていました。食べる機会がなくなった食べ物を提供するのは、高齢の方にとっても嬉しいことだと思います。もらった冊子を読むと、地域とのつながりを大切にしていると感じました。住み慣れた地域で暮らすためには、地域の方と協力することが何より大切と感じました。

5. 考察

今回の石巻・女川スタディプログラムは、震災について専門職プログラムを見据えて学body験的な短期プログラムとして試行した。2015年度と2016年度に共通して実施した a. 語り部同行の石巻市内（門脇町・日和山公園周辺）の視察、b. 石巻川開き祭り灯籠流しの見学、c. 語り部講和の聴講と女川町内の視察では、学生が、津波の大きさや甚大な被害状況に衝撃を受けたり、恐ろしさを感じたり、また被災した人の心情を察することができていた。記録には、その日に印象に残ったことについて自由に記述するように伝えているため、同日に複数の見学を行った場合は、記録されない見学も出てくる。今回、a. 語り部同行の石巻市内の視察と c. 語り部講和の聴講と女川町内の視察は、参加者全員が記録を残しているが、b. 石巻川開き祭り灯籠流しの見学については、2015年度は4名中4名が記載している一方、2016年度は6名中5名が記載していた。記載内容についても、各年とも灯籠流しの厳かな雰囲気を感じていることがわかるが、2015年度は、さらに、灯籠流しや川開き祭りが石巻市民にとってどのような意味があるのかを考察しようとしていることがわかる。両年度とも、同日に複数の見学を行っているにも関わらず、このような違いが出たのは二つの理由が考えられる。一つ目は実施日程の違い、二つ目は関わり方の違いである。2016年度は、プログラムの中でも初日の最初に実施した内容であったが、2015年度は、石巻市内や女川町内の視察を終えた上で2日目に見学している。また関わり方においても、2016年度は、見学のみであったが、2015年度は、灯籠の組み立てや川辺まで灯籠を運ぶボランティアを行っており、組み立ての際には、灯籠ひとつひとつに書かれた遺族のメッセージも読んでいる。これらの違いによって、記録数および参加者の考察内容が異なつたと考える。次年度の実施にあたって

は、開催日とプログラム実施日程の都合もあるため、石巻川開き祭り灯籠流しの見学をプログラムの内容の中でどのように位置づけるか、課題としたい。

2015年度と2016年度に共通して実施したa～cの3つの内容と、2015年度のみ実施したd. 介護事業所訪問、e. 石巻市復興まちづくり情報交流館・石巻ニューゼ訪問は、震災の状況や被害状況を理解するためのプログラムとして考えていたが、学生の記録をみると、それらだけでなく、被災した人の心情を理解しようとする記述もあった。震災の概況や被害状況については、事前学習でも知識は得ていたが、これらのプログラムに参加することは、社会福祉士の相談援助実習として置き換えるならば、職場実習・職種実習・ソーシャルワーク実習のうち、ソーシャルワーク実習の対象者理解につながる体験を得るという点では、被災地訪問経験のない学生にとって、有効なプログラムであったと考える。

2015年度は、スタディプログラムの実施自体が初めてであったため、前述の震災の状況や被害状況を理解するための体験的なプログラムに留まっていたが、2016年度は、福祉専門職による実践活動を学ぶ内容として、f. 石巻市社会福祉協議会地域福祉コーディネーターからのヒアリング（1時間）と、g. 制度外福祉仮設住宅あがらいん見学（1時間30分）を新たに設定した。しかし、日程上の都合もあり、両プログラムが体系的に組み込まれていたかという点、そうとは言い難い。学生の記録を見ても、短時間の見学やヒアリングだけでは、見学先がどのような役割を果たし、専門職がどのような支援を行っているかを「知る」ことはできても、自身が福祉や介護の専門職として同様の状況になり得ることを認識しながら、見学内容を理解するまでは達しないことが読み取れる。この点については、プログラム期間内での学習目標の設定と内容を再度検討し、より体系的に設定する必要があると考える。

一方で、2015年度に震災の状況や被害状況を理解するためのプログラムとして考えていたe. 石巻市復興まちづくり情報交流館・石巻ニューゼ訪問において、参加者は、高齢者や障がいのある人に対する避難誘導の現状や介護ボランティアについて話を聞くことができ、そのことが、専門職視点への転換の導入となっていた。

以上を踏まえ、被災地訪問経験のない学生を対象とした場合、福祉専門職として災害と向き合うことを学ぶ専門職プログラムに向けて、仮説ではあるが、学習目標の達成段階として、下記内容が挙げられると考える。

第1段階 震災の状況や被害状況を理解することができる

第2段階 被災した人の心情を察することができる

第3段階 災害発生時からのフェイズによって、専門職による支援内容が変化することを理解し、見学先の専門職がどの段階でどのような役割を担い、どのように動いていたかを知ることができる

第4段階 今後、参加者自身が専門職として同様の状況になり得ることを認識しながら、見学内容を理解しようとする事ができる

今回、2泊3日という期間の中で、プログラムの設定によって、第2段階から第3段階の一部まで達成できることがわかったが、専門職視点への転換を図るプログラムや教員による介入が必要であり、プログラムの期間や学習目標に合わせた体系的な内容の設定については、次年度実施の課題となった。特に、福祉専門職による実践活動を学ぶための見学先の設定においては、一定期間の中で体系的に学ぶために、災害発生時からのフェイズと多数の専門職⁴⁾の中で選定する必要がある。

また、今回は比較対象としていないが、プログラム実施期間中の振り返りについても課題があると考ええる。同じく学生を対象とし、石巻市をフィールドとする交流プログラムを実施している立教大学で

は、プログラム実施中の振り返りにおいても、「Keep（復興が進んでいる所、自分自身の良かった点）、Problem（復興の課題、自分自身の課題）、Try（自分達に何ができるのか）の枠組みに沿い、その日に感じたKとPをカードワークで共有し、教員からフィードバックする形で行って」いる（長倉ほか；2016）。一方、本プログラムでは、記録による省察と、学生が一言ずつその日の感想を述べたり、教員がメッセージを伝えることにとどまっており、学生同士の意見交換は実施していない。同期間での実施プログラムでも、振り返りの方法によっては、専門職視点への転換を促進させたり、体験や考察を成熟させることができるのではないだろうか。

現在、現任の専門職に対しては、災害時の支援活動について各職能団体や施設・機関にて研修が実施されており、社会福祉士養成校協会による災害福祉支援活動基礎研修や社会福祉協議会を中心とした災害ボランティアセンター運営やコーディネーター養成の研修も実施されている。本研究では、学生を対象とした専門職養成において、教育プログラムが未確立の中、仮説ではあるが、学習目標の達成段階の試論を示すことができた。しかし、福祉専門職による実践活動について単なる視察を行うのではなく、専門職視点に立った見学を行うには、学びの段階を踏まえたプログラム構成と教員によるフィードバックやスーパービジョンが必要となる。2泊3日という短い期間で先方との調整もある中、経験と省察を体系的に積み上げるプログラム実施には限界があるのと同時に、複数のプログラムによって、災害発生後のフェイズや専門職を定めた上で、専門職視点で災害ソーシャルワークを学ぶプログラムの開発が求められることがわかった。

付記

本研究の一部は平成27年度十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施した。

本研究に協力してくれた学生、プログラムにてご尽力頂いた訪問先の皆さまに感謝申し上げる。

【参考文献】

一般社団法人みらいサポート石巻制作リーフレット『川湊石巻 記憶をめぐる伝えつなぐ 3.11』

石巻川開き祭り HP <http://www.ishinomakikawabiraki.jp/>（最終閲覧日2016年9月28日）

石巻市 HP 内 復興まちづくり情報交流館中央館

<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10151000/9200/20150302212702.html>（最終閲覧日2016年9月28日）

石巻市 HP 内 石巻市高齢者福祉計画・第6期介護保険事業計画

<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10354000/8570/20150330104222.html>（最終閲覧日2016年9月28日）

石巻 NEWSée（ニューゼ）HP <http://ishinomaki-kizuna-connection.com/newseeindex.html>（最終閲覧日2016年9月28日）

川上富雄（2013a）「第1章06災害ソーシャルワークの構造―場と段階」上野谷加代子監修『災害ソーシャル

⁴⁾ 川上（2013b）は、災害時にソーシャルワーク機能を発揮する主体として、①市区町村行政のソーシャルワーカー、②社会福祉協議会のソーシャルワーカー、③地域包括支援センターや居宅介護支援事業所などのソーシャルワーカー、④福祉施設のソーシャルワーカー、⑤外部から支援に入るソーシャルワーカー、⑥外部から支援に入るソーシャルワーク機能を担う非専門職、⑦被災地住民などによるソーシャルワーク機能の7つを挙げている。

- ワーク入門』 pp30-37. 中央法規.
- 川上富雄（2013b）「第1章05災害ソーシャルワークの主体」上野谷加代子監修『災害ソーシャルワーク入門』 pp30-37. 中央法規.
- 長倉真寿美ほか（2016）「高齢者福祉、地域福祉の知識や経験を駆使して」立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室『復興支援ってなんだろう？』 pp121-127. 本の泉社.

